

BANNO, Junji

坂野潤治

歴史を 繰り返すな

YAMAGUCHI, Jiro

山口二郎

岩波書店

BANNO, Junji

坂野潤治

歴史を

繰り返すな

YAMAGUCHI, Jiro

山口二郎

岩波書店

歴史を繰り返すな

2014年8月6日 第1刷発行

著者 ばんの じゅんじ 坂野潤治 やまぐち じ ろう 山口二郎

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・三陽社 カバー・半七印刷 製本・三水舎

© Junji Banno and Jiro Yamaguchi 2014
ISBN 978-4-00-025664-3 Printed in Japan

〔R〕〈日本複製権センター委託出版物〉 本書を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrrc.or.jp/> E-mail jrrc_info@jrrc.or.jp

歴史を繰り返すな

はしがき

二〇一四年の夏は、第二次世界大戦の終結から六九年である。この年は、戦後の終わり、あるいは新たな戦前の始まりという転機になるかもしれない。

安倍晋三首相による余りに没論理的な集団的自衛権行使容認の決定を目の当たりにして、そのような思いが頭をよぎる。もちろん、ここで戦後を終わらせてはならない。そのためには、日本の一九三〇年代以降の歴史と、戦後の歩みを理解することが出発点となる。そして、本書のタイトルにもあるように、歴史を繰り返させないという決意を固めることが必要である。私自身にとって、この対談はそのための絶好の機会となった。

日本政治史がこんなに面白いものだということは、坂野潤治先生の本を読んで初めて教えられた。先生の『日本近代史』（ちくま新書）が二〇一二年の『週刊東洋経済』の政治書アンケートで一位となったことも、多くの読者がその思いを共有していることの現れであろう。

それと同時に、政治という営みの中で、権力者だけでなく、失敗した者、敗れた者も歴史を作ってきたことも、教えられた。特に、人権への制約が厳しい戦前において、民主主義や平等のために戦った多くの政治家や運動家がかかりいいところまで行っていたことを知り、民主主義の時代に政治の刷新ができないはずはないという希望を得た。それは私が同時代の日本政治を論評するうえで、

大きな糧となった。

そのような思いを共有してくれていた岩波書店の小田野耕明氏が仲介の労を取ってください、二〇一二年一月に一回、二〇一四年四月に二回坂野先生と対談する機会を与えていただいた。この本はその記録に大幅な加筆、修正を施して作ったものである。

今回、この危機的な状況で坂野先生と議論することで、改めて確信のようなものを得た。人間は過去の失敗を噛みしめるところからしか進歩しない。戦後政治体制の正統性が、戦争経験を持つ世代の退場とともに揺らぎかけている今、戦後政治体制がそもそも何だったのか、なぜこれを大事にしなければならぬかを、先生との対談を通して理解できた。その点を読者の方々が共有してくだされば、大きな喜びである。

安倍政権による「解釈改憲」の閣議決定の日に

山口二郎

近代日本の国家構想

——一八七二—一九三六

坂野潤治著

岩波現代文庫
本体二四〇円

近代日本政治史

坂野潤治著

A5判二二八頁
本体二五〇円

いまを生きるための政治学

山口二郎著

岩波現代全書
本体二一〇円

政治をあきらめない理由

——民主主義で世の中を変えるいくつかの方法

ジェリー・ストーカー
山口二郎訳

四六判三五八頁
本体三一〇〇円

集団的自衛権の何が問題か

——解釈改憲批判

奥平康弘編
山口二郎編

四六判三四二頁
本体一九〇〇円

民主党政権とは何だったのか

——キーパーソンたちの証言

山口二郎
中北浩爾編

四六判三五二頁
本体二四〇〇円

岩波書店刊

定価は表示価格に消費税が加算されます
2014年8月現在

歴史を繰り返すな

目次

第1章 改憲させないことが目的なのか

1

四年前の手紙から 2

中国の反日感情は歴史的に根深い 7

「日中友好」を言い続けること 11

戦争ごっこをやりたい? 14

立憲主義で戦えるか 17

「内閣政治」と「民本政治」の違い 20

揺れる民意に頼れるか 24

第2章 戦後の平和主義ではなぜ駄目なのか

29

「平和」の根が浅い理由 30

日本は誰に負けたのか 35

戦勝国の世界が見えていない 38

戦後民主主義のなかの「平和」 41

冷戦後のターニングポイント 46

第3章 日本に政治エリートはいるのか

53

第4章 自民党は本当に強靱なのか

反体制エリートが権力を握ると	54
今の総理は反体制エリート	59
合理的なエリートはなぜ生まれない	61
庶民感覚を突き抜ける論理	64

69

第5章 なぜ格差の縮小に取り組めないのか

保守その一は「土着保守」	70
保守その二は「自由主義保守」	73
戦前の保守勢力が糾合して	75
自民党の追求した平等の光と影	78
二段階革命のシナリオは	82
理念と政策を混同した？	84
政党への愛着の強さと弱さ	86
安倍政権は盤石なのか	88
自由主義プラス社会民主主義の可能性	90
なぜ日本では社会民主主義が弱いのか	96
戦争がもたらした落差	100

95

第6章

これからどの方向へ進むべきか

「新中間大衆の時代」は戦前にもあった？

格差・貧困問題が急浮上

士農工商の日本近代

民主党の「生活第一」路線はなぜ失敗したか

日本の左翼は小さな政府が好き

安倍政治をどう見るか

自由もあぶない

階級なき二大政党制は不毛

方向性をなくした日本

あらためて日中友好・国際協調

みんなが人間的な生活ができる社会

対抗エリートを育てる課題

あとがき〈坂野潤治〉

147

装丁 桂川 潤

改憲させないことが 目的なのか

第1章

四年前の手紙から

山口 北大を辞めるので研究室の片付けをしていましたら、坂野先生からいただいたお手紙が出てきました。二〇一〇年四月付ですから、鳩山政権も末期で、民主党政権の失速が明らかになった時です。どうして政権交代がこうもうまく行かないのだろうか、いろいろ考えて悩んでもいたのですが、先生のお手紙で元気づけられました。

坂野 そう？ 何を書いたか覚えていません。

山口 持ってきましたので、ちょっと読み上げてみます。

拝復 お手紙拝読。ちょうど学兄と飲みたいなと思っていた時でしたので、手紙で一杯やらせてください。

第一に、お互いこれまで唱えてきたことに、何らかの落とし前を付けなければならない点では、同じ立場にあると思います。

第二に、民主党でも仙谷由人さんは、厳とした「中福祉、中負担」論で、彼は近年のヨーロッパ社民についても造詣が深いです。彼が頑張っている以上、私も民主党支持の言論

を続けます。

第三に、ご指摘の通り、二一世紀臨調⁽¹⁾は、自らのスタンスを表明しないで、手続き民主主義だけを言ってきたので、私も丸二年前から一切付き合っていないせん。

第四に、私の最近の立場は、学兄なら知っておられると思う古語の「二段階革命論」です。一九一二―一四年の第一次憲政擁護運動は立憲政友会⁽²⁾を倒して加藤高明の立憲同志会↓憲政会⁽³⁾を政権に就けました。しかし、同志会はじめ大隈内閣与党三派は政権担当者としての理念と政策の共有を果たせないままに、一九一六年一〇月に野党になります。この時に悔しまぎれに加藤高明が演説したのが、「憲政の常道」です。

第五に、憲政会はその時から「苦節十年」を迎えます。憲政会の「苦節十年」という言葉は、一九二四年の第二次憲政擁護運動で再び政権に返り咲いた時の演説からきた言葉です。

(1) 二一世紀臨調 「新しい日本をつくる国民会議」の通称。一九九九年に経済界、労働界、学界、自治体首長

などが政治改革の推進を目的に結成した提言組織。主として統治機構改革などの提言を出してきた。共同代表は、佐々木毅、西尾勝、茂木友三郎、北川正恭。

(2) 立憲政友会 戦前日本の最大の政党。一九〇〇年、官僚勢力と旧自由党の流れをくむ憲政党が結集して、伊藤博文の主導で結成された。原敬のときに本格的な政党内閣を組織。一九二〇年代後半からは二大政党の一つとして憲政会(民政党)と対抗。

(3) 憲政会 一九一六年に立憲同志会が中正会・交友倶楽部と合同して組織され、立憲政友会と対抗した。二七年に政友本党と合同して立憲民政党となる。

第六に、それゆえに民主党はこれまでではなく、これから「苦節十年」を迎えなければならぬ、というのが最近の私の考えです。

第七に、それにもかかわらず、学兄と小生は、これまでの一〇年間で民主党が「苦節十年」を経験して、自己を十分に鍛え上げてきたと判断した点では、同罪です。

第八に、同じ罪を背負ったものとして、二つの対処の仕方があると思います。

(a) 「中福祉、中負担」論に、近年の西欧社民の努力の紹介から援護射撃を行うことです。これは学兄の責務かなと思つています。私は何しろ、現代ヨーロッパについて完全な音痴ですので！

(b) 今回の失敗は次の成功のための試練に過ぎないということを言い続けることです。これは僭越ながら小生の責務かな、と思つています。

第九に、学兄と違って、私は日本近代史という武器以外には何の武器も持っていません。こういう時の私のスタンスは、仙谷さんや学兄を信じて、ひたすらこの分野からの発言を続けるというものです。六〇年安保から五〇年、私にはこれだと思う人を信じ続けるといふ忍耐力ができております。

第一〇に、私としては学兄の「中福祉、中負担」論を現代日本の状況に合った形で伺いたいという気持ちで一杯です。特に国債の格下げもありうる今日の日本で、これをどう構

想するかは大変な課題です。

第一に、ヨーロッパ近代では「政治経済学」と言いました。江戸時代には「経世済民」と言いました。このことを忘れて、政治学者が経済音痴になり、経済学者が政治音痴になったのが、今日の日本の「学界」だと思っています。

第一二に、私の大好きな言葉に、トロツキーの「別個に進んで一緒に撃て」というのがあります。彼の「統一戦線論」です。分野は違いますし、時々の発言には一致しないこともあると思いますが、「一緒に撃ち」ましよう。

このお手紙は、今回の対談の一つの伏線というか、ある種の基調を構成しているかなと思います。

坂野 ちょうど四年経った今も、同じ気持ちですね。

山口 この中で先生は、民主党政権の失敗は明らかなので、この失敗を次に向けてどう生かすかという問題意識を、すでに持っておられました。これから民主党には「苦節十年」がやって来るのだから、これからの長い苦労を経て、その後また政権を取って日本の政治の改革に取り組めばいい、長いタイムスパンで考えなければいけない、という趣旨でした。

坂野 山口さんも僕も、野党時代の民主党と結構長いこと付き合ってきて、かなりな手応え

を感じていたうえでの政権奪取だったから、その分だけ失望も早く、また大きかったんだと思います。

山口 そうなのです。ただ、実際に二〇一二年に民主党が下野した後、民主党の政治家たちの敗北の打撃というのは、私たちが考える以上に深刻で、まだうちひしがれたままで、次に向かつて何かをするという態勢ができていないように思えます。臥薪嘗胆して次の機会を狙うという意欲さえないという状況で、本当に困った状態なんですね。今の安倍政治に対決することはそんなに難しい話ではないのだから、自分たちのテーゼを出していけばいいじゃないか。まさに自由と平等と平和という価値が問われているのだから、それを前面に出せばいいじゃないかと言っているんですが、そういう価値観を主張する主体がない。

こういう政党の脆弱さは、一体どこから来る問題なのでしょう？ 戦前の政党政治というのは、もちろん制限選挙制とか、官憲の干渉とか、いろいろな制約があったと思いますが、それでも「苦節十年」ができた政党が存在していたわけです。戦前の日本の政党が、そんなに脆くて弱いものじゃないとするならば、戦後に、民主化が進んで、政治家は自由に活動できるし、ましてや助成金制度まであるというこの時代に、なぜ自民党以外の政党がかくも脆くなったのか。これは大変大きな問いです。

この問題に限らず、今回の対談を通じて、坂野先生から、歴史家としての教訓やヒントをい